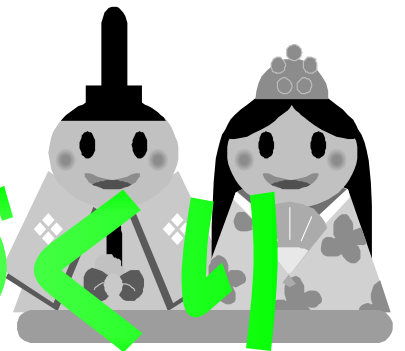




今回の協働のまちづくりは、カタクリの自生とホタルの生息地として知られ、近年では自動車メーカーの工場が進出して発展を続けている広島県三次市の酒屋地区の活動を紹介します。

森を甦らせた森のエコパーク構想 (広島県三次市)

6つの自治会を取りまとめている酒屋地区自治会連合会は、豊かな自然を残そうと荒廃する里山を甦らせる森づくりを推進しています。

荒廃した里山を甦らせ、住民の憩いと学びの場にする目的で、有志約15人が集まって荒れ果てた森を借りて整備しました。倒木を取り除き、枝打ちを行い、遊歩道を設けた森は「探検と憩いの森」と名付けました。森では、森学習やきのこ栽培などの森と触れあう取り組み、薪割りや伐採など、森を身近に体験してもらう試みを行うてきました。今では「水車カタクリの里山」、「鎮守の森」の整備が進み、「景観の森」、「セラピーの森」など、他地域と連携した構想も広がっています。



▲「探検と憩いの森」で森学習をする子どもたち

地元のみんなと地元の食材で子どもたちに提供する地産地消給食

今では地産地消給食は珍しいことではなくなりましたが、平成17年に休耕田の活用のため、子どもたちと植えたさつまいもが豊作だったことから、保育所に持つて行ったことがきっかけで始まりました。そのことに感心を持った栄養士の方から「地元のおいしい野菜を子どもたちに食べさせたい」という声が上ががり、地域の3小学校と1保育所の給食に提供する活動がスタートしました。

毎週始めに、学校給食の共同調理場からの発注を受けて、10軒程度で活動している生産グループから食材を集め、月曜日から金曜日まで毎朝、必要な食材を届けるようになりました。



▲休耕田に野菜を栽培し、地産地消給食の自治会のみなさんが育てるおいしい食材

新鮮で安心な食材を提供できるよう、土づくりと減農薬、前日収穫に心掛けています。反面、虫のついた不ぞろいの野菜の調理に手間がかかったり、天候不順やイノシシの被害で提供できないこともあります。

それでも、子どもたちの喜ぶ姿を見たいという強い思いがあり、その思いは子どもたちに伝わり、給食の食べ残しも減少したそうです。

地域づくりはすぐに目に見えた成果があるものではありません。あせらず確実に一歩ずつ積み重ねていくことによって、周囲の人を巻き込み大きな繋がりとなり広がっていく、その繋がりが広がるよう地域と町が連携することで協働のまちづくりが進められます。